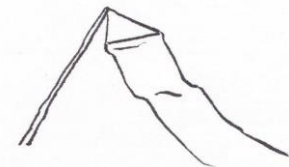


# 石橋山合戦と真田与一の奮戦

— 平安時代後期 —



「この戦い、ぜひわが息子の与一よいちに先陣せんじんをお命じくください」

そう言って源頼朝みなせとのよほどせの前に進みでたのは、岡崎四郎義実おかぎきしろうよしぎねでした。

「おお、真田与一さなだは、武芸にすぐれた若武者わかむしやと聞く、源氏再興げんじさいこうのこの戦い、みごと先陣せんじんを務め、わが軍の道を切り開け」

このころ権力けんりょくを握っていた横暴おうぼうな平家へいけに対し、その平家のため伊豆いずに流ながされていた頼朝きんぎょが、近在きんぎょの武士ぶしたちに呼びかけ平家打倒だとうの兵を挙げました。

この呼びかけにこた応えて集まった武士の中に、岡崎義実と真田与一よしただ義忠がいました。岡崎や真田というのは彼らの本拠地の地名で、当時の武士たちは、自ら切り開いた土地や支配していた領地りょうちの地名を名乗りました。これを名字みやうじ(苗字)といっています。

かまくら鎌倉を目指して兵を進める頼朝の前に立ちふさがったのが、平家側の大庭景親おおばかげちかでした。

じしやう治承四年(一一八〇)八月、折からの雨の中、日も暮れ薄暗くなった石橋山いしばしやま(現小田原

市)では、源頼朝の軍勢三〇〇〇とその一〇倍の平家軍三〇〇〇〇が向かい合っていました。

先陣を命じられた与一は、家来けらいの文三ぶんぞうを呼びました。

「私は、これから頼朝どのの命により、先陣をきって敵に向かう。おまえは、真田の里に帰りこの武士の誉れほまをわが妻に伝えてくれ」

「そのようなことはほかの者にお命じください。私は殿とのが生まれたときからの守り役もやくです。生きるも死ぬも一緒です」

「ならば、一緒に戦おう、私に続け」

赤い甲冑かつちゆうを身にまとった与一は、愛馬にまたがりか駆け出しました。

降っていた雨はやみ、雲間くもまから月の姿も見えるようになったとはいえ、与一が先頭きつて進むのは狭い一本道で、暗くて先は見えません。それでも与一は力いっぱい名乗りを上げます。

「やあやあ、遠からん者は音に聞け、近くば寄って目にもみよ、われこそは真田与一義忠なり」

最初に出会った敵は岡部おかべ弥次郎、これを難なく切り倒して、さらに進んだ与一の前に大きな男が立ちふさがりました。

「われこそは大庭景親が弟、俣野またの五郎景久。いざ勝負しょうぶ、勝負」

そう名乗ると馬上から与一に組みかかりました。どうと馬から落ちた二人は、上にな



り下になりと激しく組み合っていました。ついに与一が五郎を組み伏せました。

脇差わきざしを抜いて首を切ろうとしましたが、

切っても切っても切れません。脇差を月明つきあかりに透すかして見ると、刀は鞘はちやに収まったままでした。先ほど敵を切ったときに血のりを拭ふき取らずに鞘はちやにしまってしまったので、刀が抜けていなかったのです。

そこへ敵の長尾新五ながおしんごが駆けつけました。

けれども、闇やみの中で、どちらが敵か味方かわかりません。

「俣野どのは上か、下か」

「その声は長尾どのか、われらが敵の与一が上だ」

恐る恐る近づいてきた新五を与一は思い切り蹴り飛ばしました。この隙すきに止めとどを刺そうとした与一でしたが、続いてすぐに駆けつけた新五の弟しんごの新六が、与一の兜かぶとをつかんで頭を上げさせ、そこへ刀を突きさしました。

「長尾新六、真田与一を打ち取ったり」

その声は、石橋山中いしはしやまなかに響ひびきわたりました。

多勢たぜいに無勢ぶぜいの上、先陣の与一を打ち取られた頼朝の軍は、総崩れそうくずとなりました。

義実は、息子の死の悲しみに耐たえながらも頼朝と共に山奥たいきやくへと退却たいきやくしました。その戦いの中で、家来の文三も切り死にしました。

この戦いには負けたものの、再起さいきを図はかった頼朝は、やがて平家に勝利し、鎌倉幕府はくふを開

くことになります。

「わが運ひらが開けたのは、そなたらのおかげだ」

平家を破ったあとこの戦いの地を訪れた頼朝は、そう言って涙を流したといひます。

今、この地には与一まつを祀る佐奈田さなだ霊社れいじやが建っています。

作・画／平塚てづくり紙芝居の会 たもん丸